



# 日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2005.10 第21号



## 提◆言

### 生産者に宿るSPFピッグ・プライド

有限責任中間法人日本SPF豚協会  
SPF豚農場認定委員会委員長

柏崎 守

豚肉の輸入が自由化されたのは1971年（昭和46年）です。わが国の養豚産業は他の畜産部門に先駆けて国際競争にさらされることになりました。

生産現場では、低コスト生産が重要な経営目標となり、専業化・集約化の生産構造へ急速にシフトした時代です。しかし、大量生産への移行は疾病リスクの顕在化をもたらし、疾病対策はますます重要な課題となりました。

日本SPF豚協会が設立されたのは、輸入自由化に先立つ2年前（1969年）のことです。わが国養豚産業の実情に見合ったSPF技術が開発されたことを受け、SPF養豚の優位性を実証しながら、その普及を図ることが設立の目的でした。

ところが、生産現場では衛生問題の解決をはじめ、生産性向上が重要な課題となっているにもかかわらず、SPF養豚を評価するどころか、冷やかな見方をする養豚関係者が少なくなかったことは意外でした。このような状況であったことから、SPF技術の普及はままならず、1970年代はまさに苦難の時代であったといえます。

しかし、こんな逆境の中であって、SPF豚グループにはそうした障壁を自らの力で乗り越えるエネルギーが存在していました。SPF養豚を積極的に評価し、いち早く事業化に取り組んでいる先進的な生産者は少なくありませんでした。また、普及・推進活動にあたった技術者には、SPF技術をなんとしても根付かせ、養豚産業の発展に寄与するという強固な信念がありました。

1980年代に入るとSPF豚への風向きは大きく変わりました。オーエスキー病の発生を契機に、疾病リスクの増大に対する危機意識が業界の中で高まり、多く

の生産者がSPF技術に多大の関心を寄せるようになってきたのです。実際にSPF豚へ変換を図る農場が着実に増加するようになり、一方、国産SPFポークは消費者から高い評価を得るようになっていきました。

このような中、SPF豚生産の規格基準は当初から整備されていたのですが、その運用は各生産ピラミッドの裁量にまかされてきました。こうした事情につけ込むように、偽物のSPF豚（肉）が横行するという想定外の事態が occurred。偽物の横行は、SPF養豚の健全な発展を阻害するだけでなく、国産SPFポークに対する信頼を損なう許しがたい行為にほかなりません。

こうした事情を背景に、日本SPF豚協会は1994年に「SPF豚農場認定制度」を立ち上げ、全農場について規格基準に適合しているか否かを毎年審査することになったわけです。このような自主認定制度は養豚業界で初めての試みであり、その運用は厳正に実施されなければなりません。現在、認定農場数は172農場にまで増えましたが、生産者には高品質かつ安全なSPFポークを供給する責任があるといえます。

SPF養豚の歴史40年を振り返るとき、ここまで発展した背景は、その実利面における優位性だけではないと思います。そこには、それぞれの生産者に宿る「SPFピッグ・プライド（SPF豚を飼う誇り）」に支えられる熱意が受け継がれてきたからであり、その熱意を具体化する日本SPF豚協会が存在したからだと思うのです。

現状に満足することなく、養豚産業の全体にSPF技術を伝播させていく熱意を持ち続けることが大切だと思います。

# 11月24日、東京・JAホールで開催

## —テーマは豚肉と健康・SPF豚肉のおいしさ—

### 平成17年度国産SPFポークセミナーのご案内

新シリーズとして2000年から始まった日本SPF豚協会主催の国産SPFポークセミナー、今年で6回目を迎えることとなりました。また、昨年は念願の法人化を果たし、有限責任中間法人として新たなスタートを切り、セミナーもその記念開催となりました。

この国産SPFポークセミナーはSPF養豚に対する理解を深め、普及に努めるとともに、生産されるSPFポークの消費拡大を図るため、協会の主要事業として毎年1回開催されてきました。会場も宮崎県、北海道、愛媛と各地を回りましたが、懸案である消費者へのSPFポークの認知度アップという観点から、ここ数年は東京開催が多くなりました。

今年も会員の皆様はもちろん、できるだけ多くの消費者にも参加いただき、SPF豚を理解していただくためにと東京での開催となりました。要領は次ページのとおりです。

今年のセミナーでは、まず、昨年来進めてきた新基準によるSPF豚農場認定事業が一巡し、新制度による生産成績が集計できたことを受け、その分析結果と特長を報告します。発表者は全農畜産サービス(株)ピラミッド所属の坂口一平認定委員です。認定農場全体の傾向や特長がわかる興味深い内容となると考えられます。この報告は今後も毎年継続して行い、セミナーの目玉の一つとしたいと思います。

基調講演は、今回のセミナーのテーマである「豚肉と健康」について、医学博士・管理栄養士の本多京子先生にお話をいただきます。

本多先生はNHKの情報番組「生活ほっとモーニング」をはじめ多くのテレビ番組に解説者として出演され、健康や栄養、料理に関する著書も多数出版されています。短大や専門学校で教鞭もとっておられ、そのわかりやすいお話には定評があり、ご存知の方も多い

と思います。先生には豚肉の持つ特性、健康的な食生活に果たす役割など、専門家としての立場からご講演いただきます。

続いて「おいしさを再確認—日本のSPFポーク」をテーマにしたシンポジウムを行います。生産者から流通関係者、一般消費者の方々に話題提供していただきます。

まず、認定農場産豚肉のみを取り扱う九州の片山畜産食肉(株)の片山柘利氏に、SPFポークの販売に関わる苦労や悩み、小売店や消費者の反応、現在の状況など、20年近くにわたるその軌跡をご紹介します。

次に食肉販売事業のかたわら認定農場の経営者でもある(有)最上川ファームの太田正弘氏に、自ら生産し販売するようになったいきさつや、小売店や消費者の反応、問題点などをお話しいたします。

3番目は東京・六本木にある認定農場産豚肉の専門店「いのこ家」の林勝総料理長に、料理人の立場からSPFポークの特長、来店者の声などをお話しいたし、簡単でSPFポークのおいしさを実感できるレシピなどもご紹介いただければと思います。

最後にSPF豚肉の愛用者である田中一男氏に、SPFポークを知ったいきさつ、感想、SPF豚に対する要望や期待など、一消費者の立場から率直な意見をいただきます。

消費者にSPF豚をもっと知ってもらうにはどうすればいいのか、何ができるのかを考える機会になればと考えております。大勢の皆さまのご参加をお待ちしております。

また、セミナー終了後は恒例のレセプション(懇親会)を開催します。協会認定農場産SPFポークをご堪能いただきながらの意見交換の場となります。セミナーと合わせて、ぜひご参加下さい。

## 平成17年度「国産SPFポークセミナー」開催要項

開催日時 平成17年11月24日(木) 13:00~16:45

開催場所 JAホール  
(東京都千代田区大手町 JAビル9F)  
別紙申込書の地図をご参照下さい。

実行委員長 秦 政弘  
(総合司会) (株)サンエスブリーディング代表取締役  
協会常務理事)

### プログラム (敬称略)

1. 開会あいさつ 13:00~13:10
2. 年次報告 13:10~13:40  
「認定農場の生産成績」  
坂口 一平 (全農畜産サービス(株))
3. 基調講演 13:40~15:00  
「豚肉と健康」  
本多 京子 (医学博士・管理栄養士)  
休憩
4. シンポジウム 15:15~16:45  
「おいしさを再確認—日本のSPFポーク」
  - ・ SPFポークの販売ひとすじ16年  
片山 柘利  
(片山畜産食肉(株)代表取締役)
  - ・ SPFポークの生産から販売まで  
太田 正弘  
(有最上川ファーム取締役社長)
  - ・ SPFポークのおいしさの秘密と調理のコツ  
林 勝  
(いのこ家取締役総料理長)
  - ・ 消費者の立場から  
田中 一男  
(一般消費者・町田市)

セミナー会費 無料

### レセプション(懇親会)のご案内

セミナー終了後、会場をKKRホテル東京(竹橋・丸紅となり、JAビルより徒歩5分)に移してのレセプション(懇親会)を開催いたします。

毎年ご好評いただいているSPF豚肉のしゃぶしゃぶや加工品も多数用意する予定です。SPF豚肉のおいしさをその場で確かめる大変よい機会です。ぜひ、ご参加下さい。

開催時間 17:30~19:30

開催場所 KKRホテル東京(竹橋会館)  
(案内図は当日セミナー会場にてお配りします)

会費 5,000円

### ●申し込み方法

参加ご希望の方は同封の参加申込書にてFAXまたは郵送でお申し込み下さい。

なお、セミナー会場には余裕がありますが、レセプションは**申し込み先着180名**で締め切らせていただきます。お早めにお申し込み下さい。

申込期日 11月10日必着

### お申し込み・お問い合わせ先

(中) 日本SPF豚協会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2  
ニューセンチュリービルビル7F

TEL 03-5835-5375

FAX 03-5835-5376

### セミナー翌日には記念ゴルフコンペを開催

例年、セミナーの翌日に、会員有志によるゴルフコンペを開催しておりましたが、今年は会長杯として協会協賛でとり行うことになりました。事務局は倉持信之協会常務理事と吉田修作協会副会長です。11月25日、会場は大利根カントリークラブ(茨城県岩井市)です(ご夫婦での参加も歓迎)。定員(20名)になり次第締め切らせていただきますので、参加ご希望の方はお早めに協会にお電話下さい。

# 豚の抗酸菌症

全農家畜衛生研究所 奥田 陽

豚の抗酸菌症は非定型抗酸菌（鳥型結核菌）を原因とする疾病です。本菌が経口的に摂取されると、口腔粘膜および腸管粘膜から感染して頭部や頸部のリンパ節や腸間膜リンパ節に結核病変を形成します。

感染豚は臨床症状を示さないため、農場で摘発されることはまれで、大部分は食肉処理場における内臓検査時に、腸間膜リンパ節の肉眼病変によって摘発されます。

本菌の主な感染源として問題となるのがオガクズ床敷です。この病気そのものは古くから知られていましたが、1970年代からオガクズ床敷が普及するようになってから集団発生例が増加しました。未使用のオガクズからも本菌が検出されることもあり、本菌に汚染された輸入原木から産生された床敷用オガクズが汚染源となっていることがあります。

また、オガクズ床敷を使用していない農場では、感染豚の糞便が汚染源となります。特に母豚が感染した場合は、分娩前後において、糞便や唾液中に、一時的に大量に菌を排泄するため、哺乳豚の大部分が感染してしまいます。本病の発生率は全国平均で0.5%前後ですが、繁殖母豚に感染があり汚染の進んだ農場では、出荷肥育豚の有病率が80%にも達することがあります。

本菌が感染してリンパ節に病巣が形成されても、豚自体の増体率や繁殖成績にはほとんど影響がありません。しかし、本菌は人に対しても病原性を持っており、いわゆる結核菌以外による人の肺結核の主要な病原菌であることから、公衆衛生的な観点から豚群における清浄化が強く要請されています。

特に近年、AIDSや糖尿病などの、免疫機能が著

しく低下した患者が感染する病原体として注目されており、畜産物におけるHACCP方式の適用に対応するためにも、本病の清浄化が求められています。

治療については、本病に対する有効なワクチンはありません。また、抗生物質に対する耐性が極めて強い

ため、感染豚に対する投薬治療は実用的ではありません。そのため、本病の発生農場における対策としては、感染豚の摘発と淘汰、および菌の蔓延を防ぐための豚舎の衛生管理が防疫手段の基本となります。本病の発生農場における主な汚染源は感染母豚であるので、母豚と繁殖候補豚を対象にツベルクリン検査を実施して保菌豚を摘発します。

また、感染源がオガクズ床敷である場合は、導入先を変えるか、細菌検査によって陰性が確認されたオガクズを導入するようにします。

さらに、本菌は糞便の混ざったオガクズ床敷で旺盛に増殖するので、床敷をこまめに交換して菌の汚染度を減少させるようにします。

濃厚に汚染している豚群の場合は、オールアウト後に、徹底した床の洗浄とヨード剤や石灰による消毒を実施したのち、本病の汚染のない豚を新規導入することが必要です。

なお、全ての病気にいえることですが、農場全体に病気が広がってしまってからでは対策は困難なものになります。本病の場合は、出荷豚のと畜検査成績をもとに、農場の汚染状況を把握し、汚染が確認された場合は早期に清浄化に取り組むことが重要となります。

（この連載は今号をもって終了いたします）

# 母豚更新のタイミング

伊藤忠飼料(株)研究所 山口 勇史

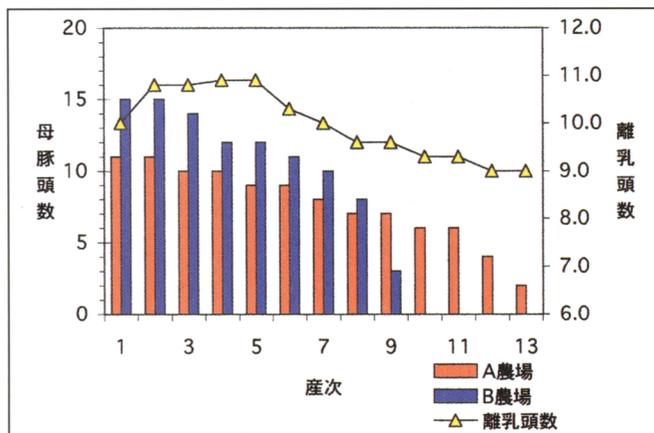
高い生産成績を安定して上げるには、適切な母豚の管理はもちろんのこと、計画的な更新が欠かせません。そこで、母豚の更新のタイミングについて話をしたいと思います。

一般的に、1分娩当たりの産子数は母豚の産次が増すにつれ増加していき、やがてピークを迎え、その後次第に減少していきます。泌乳能力や繁殖ホルモン活性、免疫機能なども同様に推移します。従って、能力の高い時期の母豚が多く占めるように群を構成する必要があります。また、病気や怪我など事故による突発的な淘汰が増加すると、群の産次構成がばらついてしまい結果的に成績に影響してしまいます。このような突発的な事故が出ないように飼育管理を心がけ、母豚1頭1頭の能力を見極めた上で、計画的に淘汰、更新を行うことで、予想を容易にし成績を安定化させることが望ましいと考えられます。

しかし、実際には、母豚の更新費用を惜しむあまり更新が少なくなってしまうたり、事故や悪い成績を出してから更新するので更新が遅れてしまったりするケースが見受けられます。

例として、具体的に二つの農場の簡単なモデルケース（母豚100頭の一貫経営）をもとに説明します。母豚の更新率が低いA農場（年間更新率25%に設定）、更新率が高いB農場（同35%）とします。両農場とも分娩回転数を年間2.3回転とすると、母豚群の産次構成は棒グラフのようになり、A農場では最長で13産までいるのに対し、B農場では9産までとなっています。

折線グラフは産次と平均離乳頭数の関係を表しています。このグラフから、2産から5産で離乳頭数が高いと読み取れるので、この範囲に多くの母豚がいるB農場の方が離乳頭数が多くなるのが分かります。仮に、



2農場の産次構成と平均離乳頭数の推移

2農場の成績と売上高の比較

	A農場	B農場	差
年間母豚更新率	25%	35%	
平均産次	5.51	4.22	
平均離乳頭数	10.2	10.4	0.2
年間離乳頭数	2,346	2,392	46
枝肉重量 (t/年)	175.95	179.40	3.45
売上高 (千円/年)	70,380	71,760	1,380

離乳した豚が全頭そのまま肥育、出荷されるならば（肥育事故率を0%と仮定）、B農場はA農場に比べ、年間で肉豚46頭、枝肉重量にして3.45 t多く出荷し、約140万円多く売上げることができます。母豚の更新の差は10頭なので、その分の費用を差し引いても更新を行う価値は十分あるといえそうです。また、ここでは事故率に差がないとしましたが、実際には老齢母豚から産まれた豚は離乳後の事故率も高い傾向にあるので、出荷頭数はさらに差がつくと考えられます。

更新のタイミングは、母豚のみならず、穴の開いた餌箱や出の悪い給水器など、設備面においても同様だと思います。更新を遅らせてしまったために、本来入ってくるはずの儲けを取りこぼしているかもしれません。この機会にチェックしてみてもいかがでしょうか。

（この連載は今号をもって終了いたします）



## いつも身近だった豚 両親を目標に勉強の日々

熊本県阿蘇市  
(有)やまとんファーム **大和 洋子**

我が家には私が小さい頃から豚がいました。当時はSPF豚ではなかったので、実家のすぐ隣に豚舎が立っていました。その頃はよく豚舎に行き、豚を大声で驚かせて遊んだり、県外まで豚の出荷について行ったりしていました。生活の中に豚がいることはごく当たり前のことでした。

私は、実家に戻って就農してから約3年になります。大学を卒業して農業とは別の職業に就いていたのですが、姉の結婚をきっかけに仕事をやめて実家に戻ってきました。

それまでの私は、農業について専門的なことを学んだことはありませんでした。しかし、いざ就農することを考えた時、すんなりと決断することが出来ました。小さい頃から豚に接していたこともあり、簡単に決められたのかもしれませんが。

そしてなにより両親の仕事に対する姿勢を見てきたことも大きかったと思います。私は、両親が「農業はきつい」「農業は厳しい」と言ったのを聞いたことがありません。私の前では、決して農業に対する辛さを見せなかったのです。

私は今、そんな両親と一緒に仕事をしています。まだまだお手伝い程度の力しかありませんが、自分のできることをしっかり頑張っていきたいと思います。日々学び、成長し、早く仕事を任せてもらえるようになりたいです。そして両親のように安全・安心でおいしい豚肉をつくれるようになりたいです。



## 「信頼ある畜産物の提供」 に徹する

鹿児島県鶴田町  
(株)シムコ鶴田事業所 **さいしよ 税所奈津実**

私は種豚生産農場にて、日々、種雄豚の日常管理および人工授精分野を主な担当部署として、従事しております。

豚それぞれに個性があり、決して一様にいくことのない生き物を相手の仕事だけに、自らの能力の未熟さを感じることも少なくありませんが、仲間の従業員と協力し合い、生産性の向上はもとより、品質の高い種豚生産を目指して、事業所が一丸となり取り組んでいるところです。

近年、「農」や「食」に対する話題がなにかと取りざたされ、人々のそれらに向けられた関心はかつてないほどの高まりを見せています。

私も普段、地元ならではの豊かな食材を取り揃えた

産地直売所や、農家や観光農園などを通じて生産者と消費者の交流を深める、グリーンツーリズム体験運動などに注目しています。

直売所は女性が中心となって成功している事例も多く、地域の明るい雰囲気伝わってくるようで、励まされる思いがします。

魅力ある地元地域の事業やイベントなどは、将来、食文化を継承する役割を担う私たちの、見聞を広める場でもあり、世代間の交流をはかる絶好の機会なのかも知れません。

若い世代の私たちは、このような身近な資源環境を十分に生かし、その上で学んでいくことは重要なことだと考えます。

農畜産物の生産・流通の過程においては、これまであいまいで見過ごされてきた現状が、誰もが商品情報を検索・追跡することが可能なまでに著しく変化し、改善されてきています。

食品の安全性が当然のように求められている今日、スーパーの店頭でも生産者の氏名や顔写真が添付され

た商品が目につくようになりました。

生産情報の明記されたSPF豚の豚肉についてもしばしば見かけることがあります。

一般の消費者のいったいどれほどの人が「SPF豚」について正しく理解して購入しているかという疑問点は、個人的には浮かぶところですが、いずれにせよ情報という「顔」の見える商品が持つ信頼性は、圧倒的な人気があるとの感触を受けています。

農畜産物を取り巻く環境は依然として厳しいですが、もちろん世の中、目を見開けば私たちの業界に限った

ことではありません。臭気問題や、疾病対策など私たちの抱える課題点は山積みですが、厳しい現状だからこそ打破する義務があり、気長で地道な努力が求められています。そんな時、私たちは試されているのだという強い使命感を抱かずにはられません。

養豚業界をさらに盛り立てて活気あるものになりたいという願いのもと、生産サイドにいる私たちは、消費者に常に生産現場の健全性を問われていることを自覚し、信頼ある畜産物の提供に徹するべきと心得て、今後さらに励んでいかなければならないと考えています。

## ● 協会からのお知らせ ●

### ● ポークセミナーにぜひご参加下さい

本誌2～3ページでご案内しております今年のポークセミナー、消費者はもちろん、広く一般の方に認定農場や協会を知っていただくための機会にしたいと考えております。会員の皆様にはご家族、関係者、お知り合いにお声をかけていただき、ぜひご出席下さい。申し込み用紙や開催要領などは協会事務局に多数準備してありますのでご連絡下さい。また、消費者へのPR方法などアイデアがありましたら、ぜひご一報下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

### ● 写真、ご意見、ご感想をお寄せ下さい

会員の皆さまの認定農場周辺の美しい自然風景やか

わい子豚など、自慢の写真をぜひ協会までお送り下さい。「豚舎のある風景」と題し、協会ホームページのトップページにどんどん掲載いたします。また、『協会だより』の感想、意見はもちろん、協会への要望、疑問・質問、エッセイ等々もあわせてお寄せください。方法は郵送、FAX、Eメール等、何でも結構です。ご不明な点は協会事務局まで。皆様からの「たより」を心からお待ちしております。

<訂正>

先号(20号)のこのコーナーに掲載いたしました協会代議員名簿の中で、下山正大理事(有下山農場)のお名前が間違っておりました。お詫びして訂正いたします。

## ● 認定情報 ●

### ● 平成15年度認定農場

[9月認定](有効期間:平成17年9月9日から18年9月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション、(有)山中畜産、ササキSPFファーム、浅野農場、岩手県・全農畜産サービス(株)東日本原種豚場、(有)ケイアイファウム北上農場、秋田県・全農畜産サービス(株)秋田SPF豚センター、(株)フカサワ深澤スワインファーム館合農場、宮城県・(株)シムコ岩出山事業所、福島県・(株)シムコ浪江事業所第二農場、(株)シムコ浪江事業所第一農場、茨城県・常陽発酵農法牧場(株)、東京養豚農業協同組合岩井牧場、オヌマファーム、(有)米川養豚場、栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、群馬県・(有)小黒養豚、(有)ほそや、(有)畑中畜産、長野県・長

野県農協直販(株)SPF種豚センター、(有)岩垂原エスピーエフ農場、(有)タローファーム、(有)クリーンポーク豊丘、千葉県・(有)東海ファーム、埼玉県・(有)松村牧場、神奈川県・(有)横山養豚、静岡県・(株)マルス農場、愛媛県・全農えひめ県本部広見種豚増殖センター、香川県・(株)七星食品多和ファーム、徳島県・日の出畜産(農)、長崎県・第三セクター職業訓練法人長崎能力開発センター、熊本県・(有)高森農場、(株)九州ノーサンファーム東肥育預託場、宮崎県・(株)九州ノーサンファームえびの種豚場、(農)守山畜産、松丸養豚、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、(有)長野養豚、(株)九州ノーサンファーム大口農場、(有)新留養豚 (以上41農場)

※次回認定委員会は平成17年12月2日(金)の予定



(有)多田ファーム  
松田 智さん  
●愛媛県大洲市

## 農協職員、旅館経営から農場へ 果敢に挑戦、走り続けるリーダー

(有)多田ファームのある大洲市は、愛媛県西部山間部に広がり、総面積432平方キロメートル、人口約52,000人の城下町で、清流肱川での鵜飼は「日本3大鵜飼」の一つにも数えられています。秋から冬にかけて広がる幻想的な雲海は「肱川あらし」と呼ばれ壮大で神秘的な風景を作り出しノスタルジックな町並みとの調和は、水郷大洲の風物詩となっています。

農業生産法人(有)多田ファームは、昭和48年、12戸の農家で始まった多田団地を基盤に、平成12年に設立された繁殖用基礎母豚1,060頭、年間22,000頭の肉豚を出荷する大規模養豚一貫経営モデル農場です。

松田さんは、その代表取締役専務兼農場長。JA愛媛たいき(旧大洲農協)で12年間現場での技術指導と経営指導に携わり、その後、家業である旅館業に12年間従事した後、多田ファームの立ち上げのため、農場長として就任するという異例な経歴の持ち主です。

経験のない1,000頭規模の養豚場立ち上げ、内心では、本当に立ち上がるのか、軌道に乗せられるのか不安を覚えたそうです。当時、最新機器の扱い方に慣れようと懸命になっている一方で、次々と送られてくる大量の繁殖用育成豚たち。そうした中、愛媛県で1番になってやる、そして日本で1番の農場にしてやるとがむしゃらに取り組みました。こうした努力が実を結び、1母豚あたり年間22.5頭を出荷するまでになりました。

松田さんの経営理念は、“経営の安定化”を図ること。

厳しい情勢の中、「国内養豚生産者が今後生き残っていくためには、絶対必要」と最優先に取り組んでいます。相場の良い時も悪い時も従業員が手を抜くことなく、いつも愛情をこめて豚肉を生産することが大切。そのため、肉豚取引価格の安定を図るべく、取引価格の一本化を目指しています。



労働意欲のない人は、できない理由ばかり並べるだけ。1%でも可能性があればできるように考えて努力すればよい。決してあきらめず、果敢に挑戦するその姿は従業員の模範となっています。

また、「豚肉は消費者が口にするもの、生産者が責任をもつべきだ」と、養豚部門では全国4番目となる全農のトレーサビリティシステム「全農安心システム」の認証を受け、生産履歴が遡及できる豚肉づくりを手がけています。さらに、「安全・安心・安価」な豚肉(自称3安豚)を生産しようとホームページ(<http://www.tada-farm.jp/>)を開設、積極的に情報発信しています。肥育飼料の無薬化にも取り組む一方、全農クリニック検査を年4回実施、農場衛生レベルの維持・向上に努めています。販売面ではJA全農えひめ「ふれ愛・媛ポーク」のサブブランドとして「オズの箱入り娘」「肱川清流豚」の名称で販売しています。

今後は、特殊飼料を使った消費者に受け入れられる新しい豚肉づくりをと日々励んでいます。さらに、「チャンスがあればさらに規模拡大を図りたい」と意欲満々。そのため、養豚管理技術はもちろん、計数管理(経営)に優れた技術者を育成したい、と熱く語ってくれました。(JA全農えひめ 前橋 英樹)

### 編集後記

日本SPF豚協会の事務所が独立して半年が経ちました。それ以前とは違って理事会、認定委員会などの会場になったり「協会の事務所」としての形ができてきたようです。通常は事務局員や赤池会長などだれかが常駐しており、会員の皆様がふらりと立ち寄られるなど「会員のサロン」といった雰囲気も出てきました。近くに来られたときにはぜひお立ち寄り下さい。11月のセミナーに参加された帰りがけにでもいかがでしょう。(哲)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは  
有限責任中間法人  
日本SPF豚協会の  
登録商標です

## 日本SPF豚協会だより

第21号 2005年10月1日発行(季刊)

発行 有限責任中間法人 日本SPF豚協会  
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2  
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376  
e-mail : j.spf.a@nifty.com  
<http://www.j-spf.com/>

発行人 赤池 洋二  
編集人 林 哲